

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

日本語版Investment Model Scaleの信頼性と妥当性の検討：親密なパートナーからの暴力関係を終結するか継続するかの意志決定の側面から

著者	土岐 祥子, 藤森 和美
雑誌名	武蔵野大学人間科学研究所年報
号	5
ページ	167-182
発行年	2016-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000395/

日本語版 Investment Model Scale の 信頼性と妥当性の検討

—親密なパートナーからの暴力関係を終結するか
継続するかの意志決定の側面から—

Assessment of Reliability and Validity of Japanese Version of
Investment Model Scale; From the Prospective of Stay/Leave
Decisions in Intimate Partner Violence (IPV) Relationship

土 岐 祥 子*
TOKI, Sachiko

藤 森 和 美†
FUJIMORI, Kazumi

【抄録】

親密なパートナーからの暴力（Intimate Partner Violence; IPV）関係を終結するか継続するかの決定に関する説明モデルのうち、海外の研究で実証的に支持されているインベストメント・モデル（Investment Model）があるが、日本の IPV 関係における検証は始まったばかりである。そこで、日本の IPV 関係において広くインベストメント・モデルを検証することが出来るように、当該モデルを測定する日本語版 Investment Model Scale (IMS) を作成し、その信頼性および妥当性を、日本の女子大学生 265 名を対象として、IPV 架空事例の映像を元に検証した。その結果「IPV 加害者であるパートナーとの関係への満足度が高く、IPV 加害者であるパートナーとの関係の代替策の質が低く、IPV 加害者であるパートナーとの関係に対する投資の程度が高いと認識している人は、IPV 加害者であるパートナーとの関係へのコミットメントが高い」というインベストメント・モデルの想定する仮説は支持され、日本語版 IMS の構成概念妥当性は認められた。また、関係性の親密さを測定する他の尺度との相関が認められたことから収束的妥当性が、個人レベルの特性を測定する他の尺度とはほとんど相関が認められなかったことから弁別的妥当性が確認された。さらに、十分な内的整合性も確認された。

キーワード：親密なパートナーからの暴力、ドメスティック・バイオレンス、デート DV、
関係終結・継続の決定要因、インベストメント・モデル、尺度、信頼性、妥
当性

* 武蔵野大学大学院人間社会研究科博士後期課程 † 人間科学研究所研究員／人間科学部人間科学科教授

I. 問題と目的

1. 背景

内閣府（2015）の調査によると、日本における配偶者間の暴力の被害率は、女性が23.7%、男性が16.6%で、4～6人に一人の割合で被害経験があるという高いレベルとなっている。交際相手からの暴力の被害率は、女性が19.1%、男性が10.6%で、5～9人に一人の割合という同じく高いレベルとなっている（内閣府、2015）。本研究において暴力とは、内閣府（2015）の調査での対象範囲と同様の、身体的暴行、心理的攻撃、経済的圧迫、性的強要の総称をいうこととする。また、配偶者のみならず交際相手からの暴力も含む概念として、親密なパートナーからの暴力（Intimate Partner Violence、以下、IPVという）という言葉を用いることとする。

IPV被害率が高いレベルにあるという現実のみならず、婦人相談所等に一時保護されたIPVの被害者（以下、IPV被害者という）のうち相当数が、一時保護期間終了後にIPV関係に戻っている。厚生労働省（2014）によると、全国で婦人相談所に一時保護された女性の17.0%が一時保護後に帰宅したと報告している。現在公表されている数値は、一時保護期間終了後の状況であり、帰宅せずに実家等に帰郷（18.5%）、福祉事務所（17.3%）や婦人保護施設（10.8%）に入所した（厚生労働省、2014）IPV被害者が、その後帰宅した（パートナーの元に戻った）かどうかについてのデータは公表されていない。それは、現実には帰宅した被害者の実数が把握できていないため、パートナーの元に戻る率が算出できず、可視化できないためであり、過小評価されている可能性は否定できない。

米国における研究では、シェルター退去直後に被害女性の34%がパートナーの元に戻り、その率は10週間後に41%に増加している（Campbell, Sullivan, & Davidson, 1995）ことや、関係を永遠に断ち切ることが出来た女性たちでも、最終的に関係を終結するまでには平均して5回はパートナーのもとに行きつ戻りつを繰り返しているということが報告されている（Okun, 1988）。

このようにIPV被害者が、一旦関係から逃れても再びパートナーの元に戻るという状況を心理学的に解明することは、IPV被害者への介入方略を検討し実行する際にも、また、IPV被害者が再被害にあうリスクを軽減する方略を検討し実行する際にも有用なものであると思われる。

2. IPV関係終結・継続の意思決定説明モデルとしての インベストメント・モデル

IPV関係を終結するか継続するか意思決定に関する研究は、主に米国において1970年代から注目を集めた。当初は、関係終結・継続の意思決定に影響を与える個別要因について多くの研究が実施された。被害者の経済的資源や関係への満足度といった個別要因については、意思決定に影響があると研究者間で同一の見解が報告されているものの、被害者の幼少期の虐待経験や暴力の深刻さ・頻度といった多くの個別要因では、研究者間で相反する結果が報告されており、特定の個別要因について決定づけることが困難なことが窺える（土岐・藤森、2013）。

そこで、多くの研究は、IPV関係から離れる意思決定のプロセスを明らかにしようとい

う方向にシフトしていった。IPV 関係終結・継続の意思決定プロセスに関する主要な説明モデルとして、学習性無力感 (Walker, 1979 斎藤訳, 1997, 1983) やトラウマティック・ボンディング (Dutton & Painter, 1981) といった暴力関係特有のモデルと、インベストメント・モデル (Rusbult, 1980) に代表される一般的な対人関係におけるモデルを IPV 関係にも適用したものがある (土岐・藤森, 2013)。暴力関係特有のモデルは、臨床的にあてはめやすく広く引用されているが、モデルが前提としている暴力への曝露の程度が高いと関係が終結出来ないという反比例関係が確認されておらず、実証的に支持されているとは言い難い (土岐・藤森, 2014)。一方、インベストメント・モデルは、IPV 関係についても多くの研究によって検証され支持されており、IPV 被害者が一旦関係から逃れても再びパートナーの元に戻るという状況を説明するには極めて有効なモデルであると思われる (土岐・藤森, 2014)。個別要因および説明プロセスの先行研究の概観については、土岐・藤森 (2013) で述べられている。表 1 は主要な三つの説明モデルについての概略を整理したものである (土岐・藤森, 2014)。

表 1 IPV 関係終結・継続の決定プロセスに関する説明モデルの比較 (土岐・藤森, 2014)

モデル	長所	短所
学習性無力感 (Walker, 1979, 1983) ・ Seligman (1975) の学習性無力感を IPV に適用。 ・ 暴力に曝され続けて、自分の無力をいったん信じると、何をしても結果は変わらないと思う。	・ 臨床的にも直観的にも当てはめやすく最も引用されているモデルである。 ・ 被害女性の臨床的な抑うつを理解するための手段として用いられている。 ・ 暴力の原因帰属によって被害女性の行動の個人差を説明しようとしている。 ・ 被害者に共通の行動の一部に学習性無力感の影響があることが実証研究で示唆されている。	・ IPV 関係の終結や IPV 関係に戻ることの説明にはならない。 ・ 適切な外部資源や関係性への満足等が認識されていない。 ・ 暴力の曝露の程度と関係終結との反比例関係が実証的に確認されていない。 ・ 被害女性が他者に助けを求める傾向があるという報告と整合しない。 ・ 関係終結・継続と学習性無力感の関係は実証研究では支持されていない。
トラウマティック・ボンディング (Dutton & Painter, 1981) ・ 社会心理学的モデル ・ 監禁者と人質などと同じくトラウマをベースにした繋がりを IPV 被害者が加害者に対して持つ。	・ IPV 関係に戻る意思決定を説明している。 ・ 最終終結までに別離と復縁を繰り返すことが多いというデータと整合している。 ・ 暴力のサイクルについて説明している。	・ 身体的暴力以外の被害者や軽度の身体的暴力の被害者について説明できない。 ・ 周期的な暴力の増大と関係終結については実証的研究に支持されていない。 ・ 暴力の曝露の程度と関係終結との反比例関係が実証的に確認されていない。 ・ IPV 関係終結・継続とトラウマティック・ボンディングの関係は実証研究ではほとんど支持されていない。
インベストメント・モデル (Rusbult, 1980) ・ 社会心理学の男女関係におけるコミットメントのモデル ・ IPV 関係へのコミットメント = 「関係性への満足度」-「代替策の質」+「関係性への投資」	・ 対人関係における関係終結・継続の意思決定を理解するための一般的アプローチで広く検証され支持されている。 ・ IPV 関係の終結・継続の意思決定について多くの実証研究において検証され支持されている。 ・ IPV 関係における別離と復縁を繰り返すプロセスを説明している。 ・ IPV 関係終結を静的プロセスではなく、動的プロセスとして理解することが可能である。 ・ 個別決定要因として実証的に支持されたものの多くを説明している。	・ PTSD や抑うつといった被害女性に共通の要素を対象としていない。 ・ 暴力の原因帰属を女性たちがどう捉えているかという側面について、対象としていない。

インベストメント・モデルは、経済的安定や情愛といった重要なニーズが IPV 関係なしには満たせないと認識する人は、IPV 関係にコミットし、関係を終結させることはできないという考えにたつものである (Rusbult, 1980)。関係へのコミットメントとは、関係を続けたいと思うこと、関係に心理的に愛着を感じていること、そのために関係に対して長期の展望を持ち続けることである。この IPV 関係へのコミットメントは、関係への満足度、代替策の質ならびに投資の程度という三つの要素により構成される。関係性への満足度とは、IPV 関係におけるコストと便益から構成される。代替策の質とは、他のパートナー、友人、家族あるいは一人であることといった IPV 関係を代替するものに関するコストと便益から構成される。投資の程度とは、IPV 関係を断ち切った場合に失うかもしれない、時間やエネルギーあるいは今までつぎ込んできた努力といった心理的資源と、共有財産や子どもといった物理的資源の大きさとそれらの相対的重要性から構成される。コミットメントは、「満足度マイナス代替策プラス投資」として算出され、これが大きいほど IPV 関係にコミットしており、関係を断ち切れないというモデルである (Rusbult, 1980; 土岐・藤森, 2014)。

3. 本研究の目的

日本の IPV 関係について、インベストメント・モデルの検証は、始まったばかりである。土岐・藤森 (2014) では、インベストメント・モデルが日本人の IPV 関係にも適用されるか否かの基礎的検証として、男女大学生 268 名を対象に IPV の架空事例および Investment Model Scale (Rusbult, Martz, & Agnew, 1998) に先行研究 (Rhatigan, Shorey, & Nathanson, 2011) で付加された 4 項目を追加した修正 Investment Model Scale 日本語訳を使って、インベストメント・モデルを検証した。その結果、女子大学生については、「パートナーとの関係への満足度が高く、パートナーとの関係の代替策の質が低く、パートナーとの関係に対する投資の程度が高いと認識している人は、パートナーとの関係へのコミットメントが高い」というインベストメント・モデルの想定する仮説は支持され、当該モデルの構成概念妥当性が認められた。

土岐・藤森 (2014) では、修正 Investment Model Scale 日本語訳につき、十分な内的整合性、構成概念妥当性が示されたが、日本の IPV 関係における独自の収束的・弁別的妥当性の検討、ならびに内容的妥当性について更なる検証の必要性を課題としていた。

そこで、本研究では、日本の IPV 関係において広くインベストメント・モデルを検証することが出来るように、土岐・藤森 (2014) で使用された修正 Investment Model Scale 日本語訳に更なる内容的妥当性の観点から修正を加えた日本語版 Investment Model Scale (以下、日本語版 IMS という) を作成し、信頼性、構成概念妥当性の更なる検証、ならびに収束的妥当性、弁別的妥当性の検証を、日本の女子大学生を対象に、土岐・藤森 (2014) で使用された IPV 架空事例を元に実施することにした。

構成概念妥当性を検討する際にインベストメント・モデルが想定する仮説は以下の通りである。「IPV 加害者であるパートナーとの関係への満足度が高く、IPV 加害者であるパートナーとの関係の代替策の質が低く、IPV 加害者であるパートナーとの関係に対する投資の程度が高いと認識している人は、IPV 加害者であるパートナーとの関係へのコミットメントが高い。」

さらに、インベストメント・モデルにおけるコミットメントならびに3つの構成要素は、関係性における親密さを感じる程度に関係していると予測される。したがって、愛情、信頼感、関係の親密さの程度を測定する他の尺度との間に、関係へのコミットメント、関係に対する満足度、関係に対する投資の程度は正の相関を示し、関係の代替策の質は負の相関を示すことが予測される。

また、インベストメント・モデルは関係性の状態の程度を示したものであり、これは、個々の個人レベルの特性とは相関がないか、あるいはほとんど相関が見られない（Rusbult et al., 1998）ことが予測される。このことは、IPV 関係を終結するか継続するかは、IPV 被害者個人の特性によって左右されるのではなく、あくまでも、関係性に対する認識によるものであるという、インベストメント・モデルの想定基盤に関わる重要なポイントでもある。

図1にIPV関係におけるインベストメント・モデルと日本語版IMSの概念図を図示した。

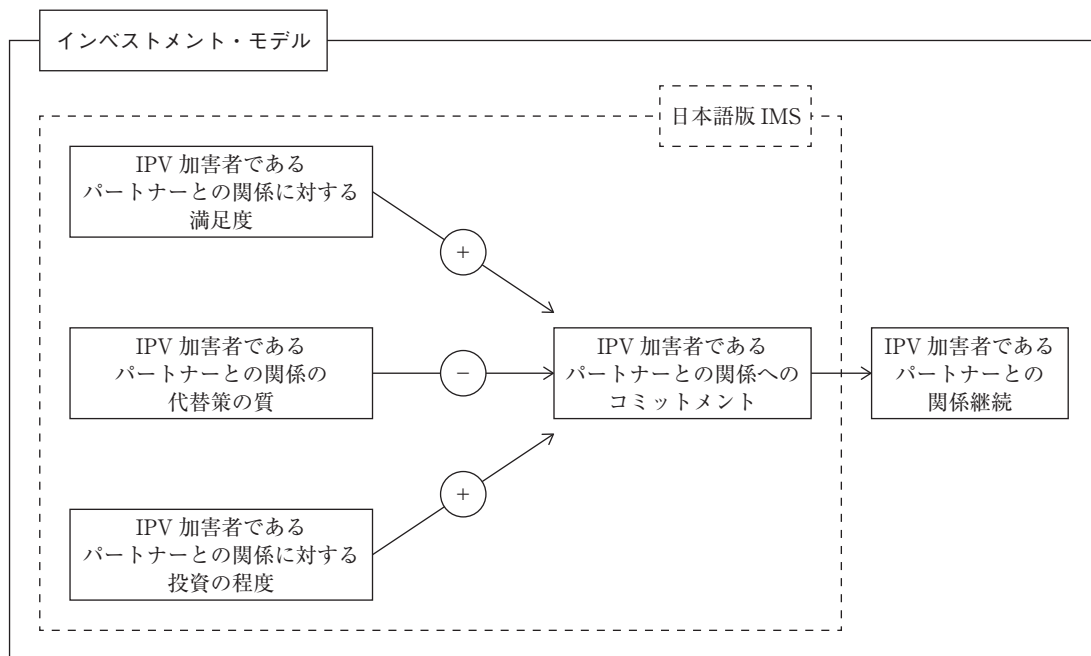


図1 IPV関係におけるインベストメント・モデルの概念図
(Rusbult et al. (1998) を基に作成)

Ⅱ. 方法

1. 調査対象

調査対象者は、都内私立大学に在籍し心理学・医療系の授業を受講する女子大学生・大学院生 281 名であった。そのうち、不完全回答者 16 名を除いた 265 名（M = 21.1 歳、SD = 4.19 歳）を分析対象とした。このうち、現在もしくは過去に交際関係があると回答した対象者は 194 名（73.2%）であった。

2. 調査方法

1) IPV 架空事例

268名の男女大学生を対象としたインベストメント・モデルの基礎的検証（土岐・藤森、2014）で使用された大学生カップルのIPV架空事例（女子大学生が被害者）を、臨床心理学コースの女子大学院生5名に対する予備調査により得られた意見等を取り入れ一部修正した架空事例を使用した。調査対象者の理解を促進するために、当該架空事例を10分程度のナレーション付き映像として作成した。調査時に当該映像を放映するとともに、架空事例を紙面でも配布した。なお、当該映像については、男女大学生25名に対する予備調査（試聴）により得られた意見等を取り入れ一部修正している。

使用した架空事例の概略は以下の通りである（土岐・藤森、2014）。

- ① 交際から1年の経つ大学生カップルのあなた（回答者、以下、あなたという）と祐樹（架空事例恋人名称、以下、祐樹という）が、同棲を始めて半年、犬を飼っていて、あなたは祐樹の車で大学に通学し、デート費用は祐樹持ちという設定。
- ② 祐樹の熱意、話の面白さ、明るさに惹かれて交際し、とても楽しい時間を共に過ごすも、同棲後ほどなく祐樹は嫉妬深くなり、行動や服装に逐一干渉を始める。
- ③ 最近数カ月は、些細なことで怒鳴られ、軽い身体的暴力も振るわれた。犬にも暴力を振るっている。
- ④ 女友達は離れて行き、唯一の理解者である友人も自分の恋人にべったりの状態。
- ⑤ あなたのことを好きな男性もいるが、祐樹ほど魅力的では無く、実家に相談しても家に帰ってこいと言われそうである。

2) インベストメント・モデル

IPV 架空事例に対して、土岐・藤森（2014）で使用した修正 Investment Model Scale 日本語訳に、更なる内容的妥当性の検討の結果、一部日本語を平易に改訂した日本語版IMSを用いて、インベストメント・モデル（Rusbult, 1980）の四要素（コミットメント、満足度、代替策、投資）の程度を測定した。なお、日本語版IMSについては、日本語の理解のしやすさという観点から、臨床心理学コースの大学院生8名に事前に実施してもらい検討を行った。

質問項目は、「祐樹との関係は他の人たちの関係に比べてずっと良い」（満足度）、「私がこれから関係を持つかもしれない祐樹以外の人は、とても魅力的である」（代替策）、「別れたら失ってしまう多くのものを、祐樹との関係につぎ込んできた」（投資）、「祐樹との関係が長く続いて欲しいと思う」（コミットメント）等であり、満足度5項目、代替策9項目、投資5項目、コミットメント7項目の合計26項目について9段階のリッカートタイプの尺度（1「全くそう思わない」、9「非常にそう思う」）である。土岐・藤森（2014）からの主な変更点は、項目21（コミットメント）「祐樹との関係を続けることにコミットしている」を、より日本語として明瞭になるように、「祐樹との関係を続けようと決意している。」としたところである。各項目の得点は、言葉の表現の方向の一貫性のために逆転項目の処理を行った。また、満足度、代替策、投資の三要素については、各質問項目における概念の理解を促すため、それぞれ5項目の導入質問（採点対象外）が用意されている。

3) 収束的妥当性関係質問紙

日本語版 IMS の収束的妥当性を検討するために、原尺度（Rusbult et al., 1998）の収束的妥当性の検討に使用された尺度を基に、親密な関係性の質を測定する以下の 3 つの質問紙を用いて、IPV 架空事例に対して回答を求めた。

a) 日本語版 Love-Liking 尺度

原尺度（Rusbult et al., 1998）では、Rubin（1970）による好意とロマンティックな愛情を測定する The Liking and Loving Scale が収束的妥当性を検討する際の尺度の 1 つとして用いられていたが、本研究では、The Liking and Loving Scale の日本語版である、日本語版 Love-Liking 尺度（藤原・黒川・秋月、1983）を用いた。藤原他（1983）では、The Liking and Loving Scale（Rubin, 1970）の Loving13 項目、Liking13 項目ではなく、Love 11 項目、Liking9 項目を推奨しているため、本研究では、Love11 項目、Liking9 項目の 9 段階リッカートタイプの質問紙を使用した。なお、本研究における各因子の Cronbach's α 係数は、「Love」.94、「Liking」.94 であった。

b) The scale of Inclusion of Others in the Self

原尺度（Rusbult et al., 1998）の収束的妥当性を検討する際の尺度の 1 つとして用いられた Aron, Aron, & Smollan（1992）の The scale of Inclusion of Others in the Self（以下、IOS という）の日本語訳を用いた。IOS は、7 段階の Venn 式ダイアグラムであり、自己とパートナーを表す円（ダイアグラム）が重なる 7 段階の程度を表し、回答者は、関係性を最もよく表している円（ダイアグラム）を選択するものである。なお、原著者（Aron, A.）より使用許諾を得た。

c) The Trust Scale

原尺度（Rusbult et al., 1998）の収束的妥当性を検討する際の尺度の 1 つとして用いられた Rempel, Holmes, & Zanna（1985）による親密な関係性における信頼感を測定する The Trust Scale の日本語訳を用いた。The Trust Scale は合計 17 項目、7 段階リッカートタイプの質問紙である。なお、日本語訳については、原著者（Rempel, J.K.）より許諾を得るとともに、学術論文翻訳業者によるバックトランスレーションを実施した。なお、本研究における Cronbach's α 係数は .88 であった。

4) 弁別的妥当性関係質問紙

日本語版 IMS の弁別的妥当性を検討するために、原尺度（Rusbult et al., 1998）の弁別的妥当性の検討に使用された尺度を基に、個人レベルの特性を測定する以下の 3 つの質問紙を用いた。

a) 自尊感情尺度

原尺度（Rusbult et al., 1998）では、弁別的妥当性を検討する際の尺度の 1 つとして、Multivariate Evaluation of Self（Hoyle, 1991）が用いられていたが、本研究では、自尊感情尺度として一般的に用いられているローゼンバークの自尊心尺度（Rosenberg, 1965）の日本語版である自尊感情尺度（山本・松井・山成、1982）を用いた。自尊感情尺度は、10 項目の 5 段階リッカートタイプの質問紙である。なお、本研究における Cronbach's α 係数は .86 であった。

b) 認知欲求尺度

原尺度 (Rusbult et al., 1998) では、弁別的妥当性を検討する際の尺度の1つとして、The scale Multivariate Need for Cognition (Tanaka, Panter, & Winborne, 1988) が用いられていたが、本研究では、同じ認知欲求、すなわち動機付けの個人差、を測定する1因子尺度である Need for Cognition Scale (Cacioppo & Petty, 1982) の日本語版である認知欲求尺度 (神山・藤原、1991) を用いた。認知欲求尺度は、15項目の7段階リッカートタイプの質問紙である。なお、本研究における Cronback's α 係数は .83 であった。

c) Locus of Control 尺度

原尺度 (Rusbult et al., 1998) の弁別的妥当性を検討する際の尺度の1つとして、コントロール感を3つの側面から測定する Levenson (1981) の Internality, Powerful Others, and Chance Scale が用いられていた。しかし、本研究では、当該尺度の作成基盤となった、コントロール感に関する有力な指標である Rotter (1966) の The Internal-External Scale の日本語版である Locus of Control 尺度 (鎌原・樋口・清水、1982) を用いた。Locus of Control 尺度は、18項目の4段階リッカートタイプの質問紙である。なお、本研究における Cronback α 係数は .77 であった。

3. 手続

2015年5月から2015年7月の期間において、調査対象者に対して大学の講義時間内に、研究目的・調査参加に関するリスク・参加の任意性等を説明し、質問紙を配布した。IPVに関する架空事例を放映し、自分の身に起きたこととして考えてもらった上で、質問紙への回答を要請した。日本語版 IMS、日本語版 Love-Liking 尺度、IOS, The Trust Scale については、IPV 架空事例の被害者の気持ちを想定して回答することを要請した。なお、一部の調査対象者については、講義時間の関係上、架空事例の映像放映後、質問紙を持ちかえって回答し、後日研究者宛に返送してもらった。

調査実施後、先行研究についての説明を実施し、調査対象者に IPV 被害についての理解を深めてもらうよう配慮すると共に、質問紙調査結果の速報値を大学内の個別電子掲示板等でフィードバックした。

4. 倫理的手続き

調査対象者に対して、IPVに関する架空事例に対する回答を求めることを含む本研究参加に係るリスク等について口頭にて説明したうえで、質問紙への参加は任意であること、参加に同意しなくても何ら不利益はないこと、参加に同意しない場合は、退席しても白紙で提出してもよいことを合わせて説明した。さらに、回答は無記名式で、データ収集についても、連結可能な匿名化情報として管理することで個人情報保護について配慮することを説明した。そのうえで、質問紙への回答をもって調査対象者の同意を得たものとした。また、調査参加中あるいは参加後に気分が悪くなった場合の対応を文書にて伝えた。なお、本研究については、武蔵野大学人間科学部研究倫理委員会の承認を得ている。

Ⅲ. 結果

1. 記述統計

本研究における各変数の平均値及び標準偏差を表 2 に記載した。

日本語版 IMS

満足度は得点範囲の低いレベル ($M=13.74$, $SD=8.20$)、代替策は得点範囲の中程度 ($M=43.44$, $SD=12.83$)、投資も得点範囲の中程度と認識され ($M=30.96$, $SD=7.40$)、コミットメントは得点範囲の低いレベルとなっている ($M=28.88$, $SD=10.13$)。これらの結果は、日本の男女大学生を対象としたインベストメント・モデルの基礎的検証（土岐・藤森、2014）および性的被害経験のある女子大学生を対象とした米国の先行研究（Rhatigan et al., 2011）と同様の傾向を示した。

その他の尺度

Love-Liking 尺度の Love の平均値 ($M=50.62$, $SD=19.43$) および Liking の平均値 ($M=39.73$, $SD=17.30$) は、交際関係にある平均 19.73 歳の女性（主に大学生）を対象とした先行研究（藤原他、1983）で報告されているレンジよりも低めとなっている。また、Trust の平均値 ($M=50.54$, $SD=15.14$) も、交際関係にある平均 29 歳のカップルを対象とした先行研究（Rempel et al., 1985）で報告されているレンジよりも低めとなっている。これは、本研究が IPV 架空事例という交際関係のうちでも暴力的な事例を対象としていることによる可能性がある。

Inclusion of Others in the Self、Locus of Control の平均値（それぞれ $M=5.35$, $SD=1.79$, $M=46.72$, $SD=6.68$ ）は、大学生を対象とした先行研究（それぞれ、Aron et al., 1992、鎌原他、1982）で報告されているレンジ内となっている。また、自尊感情、認知欲求の平均値（それぞれ、 $M=28.41$, $SD=7.98$, $M=59.04$, $SD=12.77$ ）も女子大学生を対象とした先行研究（それぞれ、山本他、1982、神山・藤原、1991）で報告されているレンジ内となっている。

表 2 各変数の平均値、標準偏差、最小値、最大値、得点範囲

変数	$n=265$				得点範囲
	M	SD	Min	Max	
満足度	13.74	8.20	5	41	5 - 45
代替策の質	43.44	12.83	12	81	9 - 81
投資の程度	30.96	7.40	5	45	5 - 45
コミットメント	28.88	10.13	7	58	7 - 63
Love	50.62	19.43	11	92	11 - 99
Like	39.73	17.30	9	81	9 - 81
Inclusion of Others in the Self	5.35	1.79	1	7	1 - 7
Trust	50.54	15.14	17	100	17 - 119
自尊感情	28.41	7.98	10	50	10 - 50
認知欲求	59.04	12.77	21	97	15 - 105
Locus of Control	46.72	6.68	23	66	18 - 72

2. 日本語版 IMS の因子分析

日本語版 IMS の因子構造を確認するため、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。固有値の変動状況及び解釈の可能性から、4 因子が抽出された。ただし、各項目のうち、因子負荷量が 0.35 に満たなかった 2 項目（コミットメント項目 22「祐樹との関係が近い将来終わるとしても、あまり心を乱さないと思う。」、コミットメント項目 23「一年以内に、私は、祐樹とは別の人とつきあっているだろう。」）を削除し、再度、24 項目を対象に因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。表 3 に 2 度目の因子分析の結果を記載する。再び 4 因子が抽出された。第 1 因子には、満足の 5 項目（1～5）全てが、第 2 因子には代替策の 9 項目（6～14）全てが、第 3 因子には投資の 5 項目（15～19）

表 3 日本語版 IMS 探索的因子分析結果

n=265				
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子「関係への満足度」 ($\alpha = .93$)				
1 (満足度) 祐樹との関係に満足感を感じている。	0.75	0.09	0.01	0.16
2 (満足度) 祐樹との関係は、他の人たちの関係に比べてずっと良い。	0.82	0.04	0.02	0.00
3 (満足度) 祐樹との関係は理想に近い。	0.94	-0.04	-0.08	-0.07
4 (満足度) 祐樹との関係は、私を幸せにしてくれる。	0.84	-0.04	0.02	0.08
5 (満足度) 祐樹との関係は、「親しい関係」や「一緒にいる関係」に私が求めるものを、十分に満たしてくれる。	0.76	-0.01	0.19	-0.03
第2因子「代替策の質」 ($\alpha = .89$)				
6 (代替策) 私がこれから関係を持つかも知れない祐樹以外の人は、とても魅力的である。	0.04	0.75	-0.01	0.01
7 (代替策) 「祐樹に代わる関係」（別の人とつきあう、友人と時間を過ごす、自分ひとりで時間を過ごすなど）は、理想に近い。	-0.14	0.86	0.08	0.20
8 (代替策) 祐樹とつきあっていなければ、他の魅力的な人を見つけてつきあっていたと思う。	-0.01	0.67	0.22	-0.13
9 (代替策) 「祐樹に代わる関係」（別の人とつきあう、友人と時間を過ごす、自分ひとりで時間を過ごすなど）は、魅力的だ。	-0.18	0.84	0.14	0.04
10 (代替策) 「親しい関係」や「一緒にいる関係」に私が求めるものは、「祐樹に代わる関係」でも簡単に満たされる。	0.04	0.67	-0.02	-0.19
11 (代替策) 私は、私自身の要求を自分で満たすことができる。	0.13	0.56	-0.09	-0.18
12 (代替策) 私の経済的な要求は、私自身か祐樹以外の人たちによって簡単に満たされる。	0.07	0.57	-0.25	0.15
13 (代替策) もし祐樹と別れることになったとしても、私は安心して安全な感じを抱けると思う。	0.09	0.43	-0.22	-0.03
14 (代替策) 全体として、「祐樹に代わる関係」については、どの説明が一番あてはまりますか。（1：とても質が悪い、9：とても質が良い）	0.09	0.65	-0.10	-0.01
第3因子「投資の程度」 ($\alpha = .85$)				
15 (投資) 別れたら失ってしまう多くのものを、祐樹との関係につき込んできた。	-0.02	0.04	0.80	0.02
16 (投資) 余暇の過ごし方など、私の生活の多くは祐樹とつながっていて、もし別れたらそれらすべてを失うと思う。	-0.03	-0.14	0.65	0.16
17 (投資) 多くのものを祐樹との関係につき込んできたように、祐樹との関係にどっぷりつかっている感じがする。	0.05	0.01	0.85	-0.06
18 (投資) もし祐樹と別れたら、私の友人関係や家族関係は、複雑なものになると思う。	0.05	-0.09	0.46	0.09
19 (投資) 私が知っている他の人に比べて、私は祐樹との関係に多くのものを投資してきた。	0.06	0.06	0.76	-0.12
第4因子「関係へのコミットメント」 ($\alpha = .91$)				
20 (コミットメント) 祐樹との関係が長く続いてほしいと思う。	0.04	-0.02	0.12	0.72
21 (コミットメント) 祐樹との関係を続けようと決意している。	0.13	0.00	0.13	0.65
24 (コミットメント) 私は祐樹ととても強く結ばれていて、祐樹との関係にとっても愛着を感じている。	0.09	0.05	0.07	0.73
25 (コミットメント) 祐樹との関係が永遠に続くことを望んでいる。	-0.02	-0.02	-0.10	0.99
26 (コミットメント) 例えば、数年後の祐樹との関係を想像するといったように、祐樹との将来に関心が向いている。	0.03	-0.01	-0.12	0.82

全てが、第 4 因子には上記 2 項目を除いたコミットメントの 5 項目（20、21、24～26）全てが関与しており、0.43 以上の高い負荷量を示した。よって、第 1 因子は「関係への満足度」、第 2 因子は「代替策の質」、第 3 因子は「投資の程度」、コミットメント項目 22 と 23 を除いた第 4 因子は「関係へのコミットメント」と命名した。

次に上記の探索的因子分析の結果に基づいて検証的因子分析（最尤法）を行った。その結果は、図 2 に示したとおりである。「関係への満足度」「代替策の質」「投資の程度」「関係へのコミットメント」の 4 因子から各観測変数に対する影響指数はすべて .51 以上 ($p < .001$) を示しており、各因子と観測変数は適切に対応していると言える。また、「関係へのコミットメント」と「関係への満足」とは比較的強い正の相関 ($r = .69, p < .001$)、「代替策の質」とは比較的強い負の相関 ($r = -.56, p < .001$)、「投資の程度」とは比較的強い正の相関 ($r = .63, p < .001$) がみられた。そのほかのパス係数もすべて有意 ($p < .001$) であった。

適合性の指標は、 $\chi^2 (246, n = 265) = 642.001, p < .001$, GFI = 0.828, AGFI = 0.790, CFI = 0.904, RMEA = 0.078 であった。一般的に GFI は 0.90 程度が必要といわれるが（豊田、1998）、0.828 とやや低くなっている。GFI は観測変数の数が多く自由度が大きい場合は悪くなる傾向にあり、その場合には GFI は参考程度にとどめ、RMSEA によってモデルを選択することが推奨される（豊田、2003）。本モデルは自由度が 246 と大きいことから、GFI が低くなっていると考えられ、他方、RMSEA は 0.08 以下という基準内（山本・小野寺、2002）であり、CFI も 0.9 以上であることから、データのモデル適合度は許容範囲であることが示唆された。

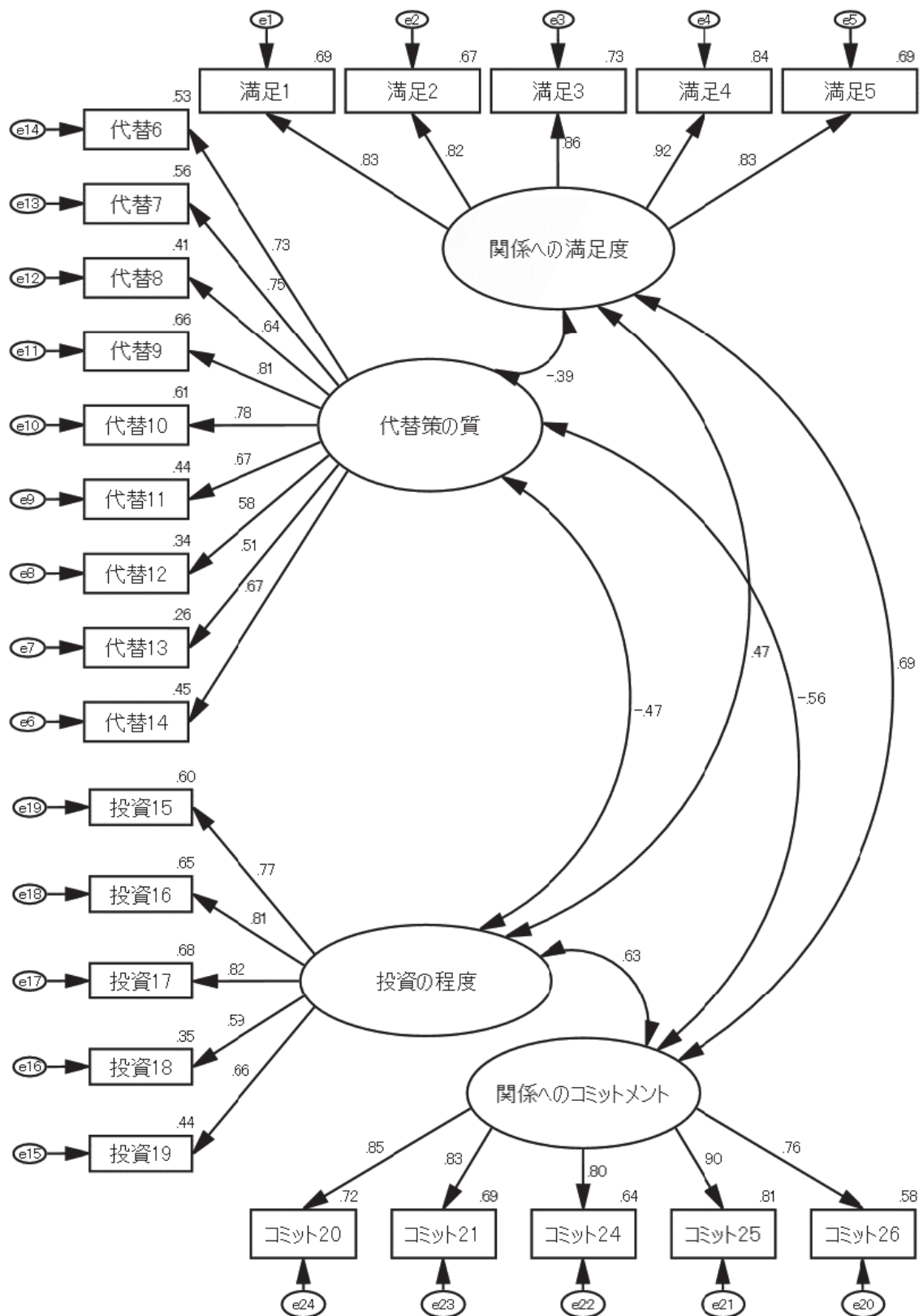


図2 日本語版IMS 確認的因子分析結果

3. 日本語版 IMS の各因子間の重回帰分析

因子分析によって導き出された日本語版 IMS の各因子につき、インベストメント・モデルが想定する「IPV 加害者であるパートナーとの関係への満足度が高く、IPV 加害者であるパートナーとの関係の代替策の質が低く、IPV 加害者であるパートナーとの関係に対する投資の程度が高いと認識している人は、IPV 加害者であるパートナーとの関係へのコミットメントが高い。」という仮説検証のために、「関係へのコミットメント」を目的変数、「関係への満足度」「代替策の質」「投資の程度」を説明変数とし、重回帰分析を行った。図 3 に重回帰分析の結果を示す。この結果、重決定係数が有意 ($R^2 = .567, p < .001$) であった。また、「関係への満足度」「代替策の質」「投資の程度」の標準偏回帰係数はいずれも有意 ($\beta = .370, p < .001$ 、 $\beta = -.308, p < .001$ 、 $\beta = .295, p < .001$) であった。よって、「関係への満足度」「代替策の質」「投資の程度」のいずれもが、目的変数「関係へのコミットメント」に対して説明変数としての意味を持つことが明らかにされた。

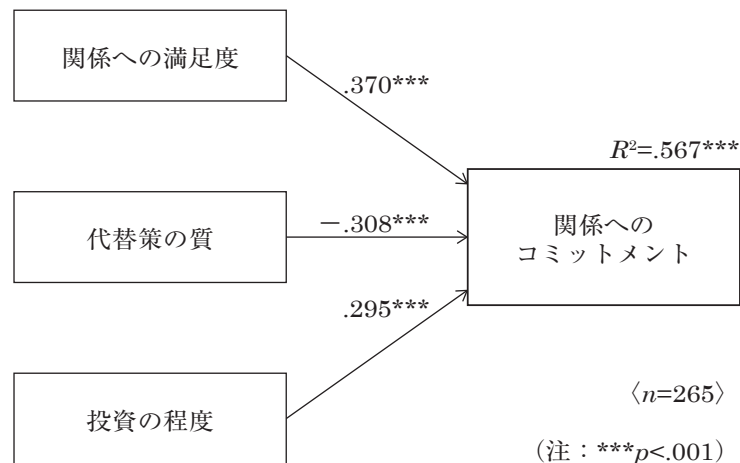


図 3 IMS 尺度 重回帰分析結果 (β 係数、 R^2)

4. 内的整合性（信頼性）の検討

因子分析によって導き出された日本語版 IMS の各因子の Cronbach's α 係数を算出した結果、「関係への満足度」因子で .93、「代替策の質」因子で .89、「投資の程度」因子で .85、「関係へのコミットメント」因子で .91 の値を示しており（表 3）、十分な内的整合性が示唆された。

5. 収束的妥当性の検討

日本語版 IMS の各因子と、親密な関係性の質を測定する 3 つの質問紙の 4 変数（Love, Liking, Inclusion of Other in the Self, Trust）との 2 変量の相関分析を行った。表 4 に結果を示す。「関係への満足度」と 4 変数は $r = .278 \sim .633$ ($p < .01$) と正の相関が、「代替策の質」と 4 変数は $r = -.285 \sim -.439$ ($p < .01$) と負の相関が、「投資の程度」と 4 変数は $r = .329 \sim .574$ ($p < .01$) と正の相関が、「関係へのコミットメント」と 4 変数は $r = .313 \sim .725$ ($p < .01$) と正の相関がそれぞれ見られた。

表4 日本語版 IMS の各因子と親密な関係性の質の4変数との相関分析

	n=265			
	関係への満足度	代替策の質	投資の程度	関係へのコミットメント
Liking-Love 尺度				
Love	.565**	-.439**	.574**	.725**
Liking	.525**	-.297**	.411**	.556**
Inclusion of Other in the Self	.278**	-.285**	.329**	.313**
Trust	.633**	-.370**	.383**	.642**

(注: ** $p < .01$)

6. 弁別的妥当性の検証

日本語版 IMS の各因子と、個人レベルの特性を測定する3つの質問紙の3変数（自尊感情、認知欲求、Locus of Control）との2変量相関分析を行った。表5に結果を示す。日本語版 IMS の各因子と自尊感情および認知欲求との間には有意な相関は見られなかった。Locus of Control と「代替策の質」との間には有意な弱い負の相関が見られたものの ($r = .228$, $p < .01$)、Locus of Control と他の日本語版 IMS の因子との間には、有意な相関が見られないあるいは有意な相関が見られても相関係数が低く ($r = -.195$, $p < .01$, $-.145$, $p < .01$) ほとんど相関がないことが示唆された。

表5 日本語版 IMS の各因子と個人レベルの特性の3変数との相関分析

	n=265			
	関係への満足度	代替策の質	投資の程度	関係へのコミットメント
自尊感情	-.079	.113	-.078	-.041
認知欲求	-.026	-.060	.086	.021
Locus of Control	-.195**	.228**	-.145*	-.110

(注: * $p < .05$, ** $p < .01$)

IV. 考察

本研究では、日本の IPV 関係において広くインベストメント・モデルを検証することが出来るように、土岐・藤森（2014）で使用された修正 Investment Model Scale 日本語訳に、更なる内容的妥当性の観点から修正を加えた日本版 IMS を作成し、その信頼性および妥当性を、IPV 架空事例（土岐・藤森、2014）を元にした映像を使い、女子大学生を対象として検証した。

探索的因子分析の結果、「関係への満足度」「代替策の質」「投資の程度」「関係へのコミットメント」の4因子が抽出され、これらを使った確認的因子分析の結果、各因子とそれぞれの観測変数は適切に対応していることが示された。また、データのモデル適合性も許容範囲であることが示唆された。さらに、相関分析において「関係への満足度」「投資の程度」と「関係へのコミットメント」との間に比較的強い正の相関が、「代替策の質」と「関係へのコミットメント」との間に比較的強い負の相関がみられたこと、ならびに、重回帰分

析において「関係への満足度」「代替策の質」「投資の程度」が「関係へのコミットメント」に有意な影響を及ぼすことが明らかになった。これらのことから、「IPV 加害者であるパートナーとの関係への満足度が高く、IPV 加害者であるパートナーとの関係の代替策の質が低く、IPV 加害者であるパートナーとの関係に対する投資の程度が高いと認識している人は、IPV 加害者であるパートナーとの関係へのコミットメントが高い」というインベストメント・モデルの想定する仮説は支持され、日本語版 IMS の構成概念妥当性は認められた。

親密な関係性の質を測定する 4 変数 (Love, Liking, Inclusion of Other in the Self, Trust) と「関係への満足度」「投資の程度」「関係へのコミットメント」との間には、それぞれ、正の相関がみられたこと、ならびに、「代替策の質」との間には、負の相関がみられたことから、収束的妥当性は認められた。個人レベルの特性を測定する 3 変数 (自尊感情、認知欲求、Locus of Control) と日本語版 IMS の 4 因子との間には、Locus of Control と「代替策の質」との間に有意な弱い負の相関がみられたものの、それ以外は、有意な相関はみられないか、有意な相関がみられても相関係数が低くほとんど相関がなかった。したがって、弁別的妥当性についても認められることが示唆された。

信頼性に関しては、日本語版 IMS の各因子につき、十分な内的整合性が示された。

ただし、本研究は必ずしも被害経験のない女子大学生を対象とした架空事例による検証であるため、その解釈には慎重になる必要がある。

IPV 関係における日本語版 IMS の信頼性と妥当性の検証である本研究では、必ずしも被害者ではない大学生に対する IPV 架空事例の使用という制約はあるものの、一定の信頼性および妥当性が確認された。しかしながら、尺度の妥当性・信頼性は 1 つのデータから保証されるものでなく、多くのデータの積み重ねから繰り返し確認されることが重要である (菅原、1994)。今後は、さらなるデータを積み重ね、日本語版 IMS の信頼性・妥当性を引き続き検討するとともに、IPV 被害者を対象として実際の IPV 関係について関係終結・継続の意思決定をも含めたインベストメント・モデルの検証を進め、日本の IPV 関係におけるインベストメント・モデルの研究成果を積み重ねて行くことが期待される。

文献

- Aron, A., Aron, E.N., & Smollan, D. (1992). Inclusion of other in the self-scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 939-954.
- Campbell, R., Sullivan, C.M., & Davidson, W.S. (1995). Women who use domestic violence shelters: Changes in depression over time. *Psychology of Women Quarterly*, **19**(2), 237-255.
- Cacioppo, J.T. & Petty, R.E. (1982). The need for cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 116-131.
- Dutton, D.G. & Painter, S.L.(1981). Traumatic bonding: The development of emotional attachments in battered women and other relationships of intermittent abuse. *Victimology*, **6**, 139-155.
- 藤原武弘・黒川正流・秋月左都士 (1983). 日本語版 Love-Liking 尺度の検討、広島大学総合科学部紀要 **III**, **7**, 265-273.
- Hoyle, R.H.(1991). Evaluating measurement models in clinical research: Covariance structure analysis of latent variable models of self-conception. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **59**, 67-76.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 (1982). Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究、**30**、302 - 307.

- 神山貴弥・藤原武弘 (1991). 認知欲求尺度に関する基礎的研究 社会心理学研究、**6**、184 - 192.
- 厚生労働省 雇用均等・児童家庭局家庭福祉課 (2014). 平成 24 年度婦人保護事業実施状況報告の概要 .
- Levenson, H.(1981). Differentiatin among internality, powerful others, and chance. In H. M. Lefcourt (ED.), *Research with the locus of control construct* (Vol1, 15-63). New York: Academic Press.
- 内閣府 男女共同参画局 (2015). 男女間における暴力に関する調査報告書 .
- Okun, L.(1988). Termination or resumption of cohabitation in women battering relationships: A statistical study. (In G.T. Hotaling, & D. Finkelhor (Eds), *Coping with family violence: Research and policy perspective* (p107-119).) Thousand Oaks, CA: Sage Publications, Inc..
- Rempel, J.K., Holmes, J.G., & Zanna, M.P.(1985). Trust in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**, 95-112.
- Rhatigan, D.L., Shorey, R.C., & Nathanson, A.M.(2011). The Impact of Posttraumatic Symptoms on Women's Commitment to a Hypothetical Violent Relationship: A Path Analytic Test of Posttraumatic Stress, Depression, Shame, and Self-Efficacy on Investment Model Factors. *Psychological Trauma: Theory, Research, Practice, and Policy*, **3**(2), 181-191.
- Rosenberg, M.(1965). *Society and the adolescent self-image*. Prinston Univ. Press,
- Rotter, J.B.(1966). Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monograph*, **80**, 1-28.
- Rubin, Z.(1970). Measurement of romantic love, *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 265-273.
- Rusbult C.E.(1980). Commitment and satisfaction in romantic associations: A test of investment model. *Journal of Experimental Social Psychology*, **16**, 172-186.
- Rusbult C.E., Martz, J.M., & Agnew, C.R. (1998). The investment model scale: Measuring commitment level, quality of alternatives, and investment size. *Personal Relationships*, **5**, 357-391.
- Seligman, M. E. P. (1975). *Helplessness; On depression, Development, and Death*. San Francisco, Freeman.
- 菅原健介 (1994). 心理尺度の作成過程 堀洋道・山本真理子・松井豊 (編) 心理尺度ファイル 垣内出版、637-652.
- Tanaka, .S., Panter, A.T., & Winborne, W.C.(1988). Dimensions of the need for cognition: Subscales and gender differences, *Multivariate Behavioral Research*, **23**, 35-50.
- 土岐祥子・藤森和美 (2013). 親密なパートナーからの暴力 (IPV) 関係を終結するか継続するかの決定に関する研究の概観 学校危機とメンタルケア第5巻, 50-68.
- 土岐祥子・藤森和美 (2014). インベストメント・モデルの基礎的検証－親密なパートナーから暴力関係を終結するか継続するかの意思決定の側面から－ トラウマティック・ストレス第12巻第2号、77-87.
- 豊田秀樹 (1998). 統計ライブラリー 共分散構造分析 [入門編]－構造方程式モデリング－ 朝倉書店
- 豊田秀樹 (2003). 統計ライブラリー 共分散構造分析 [疑問編]－構造方程式モデリング－ 朝倉書店
- 山本嘉一郎・小野寺孝義 (2002). Amos による共分散構造分析と解析事例 [第2版] ナカニシヤ出版
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究、**30**、64-68.
- Walker, L.E. (1979). *The battered women*. New York: Harper and Row. (斎藤学監訳、穂積由利子訳 (1997). バタードウーマン：虐待される妻たち. 金剛出版)
- Walker, L.E. (1983). Victimology and the psychological perspectives of battered women. *Victimology*, **8**: 82-104.